



Title	宇治大君論序説
Author(s)	渡會, 敦幸
Citation	詞林. 1989, 6, p. 1-13
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67274
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

宇治大君論序説

池田金目 敦幸

本稿では、次の二点について考察する事とする。第一点は、源氏物語作品世界に存在している大君の人物像、即ち作品上に描かれている、或いは描かれて仕舞っている大君の人物像を探る事である。第二点は、第一点で考察した人物像が、何故その様な人物像にならねばならなかったのか、作者は何故、大君をその様な人物として造形したのであるか、という事である。以上の二点を考えるにあたり、第一点に於ては、彼女の結婚拒否を中心に、第二点に關しては、物語の構造に着目して、論を進めてみたいと思う。

第一章 大君像の輪郭

一

大君の結婚拒否の理由としては、幾つかの事が、既に指摘されている。順次みていく事とするが、先ずは八宮の遺訓から考

えてみる。彼の遺訓は次の如くである。

我が身一つにあらず、過ぎ給ひにし、御おもてぶせに、輕しき心ども、つかひ給ふな。おぼろけのよすがならで、人の言にうち靡き、この山里をあくがれ給ふな。(中略)

まして、をむなは、さるかたに絶え籠りて、いちじるしくいとほしげなる、よそのもどきを、負はざらむなむ、よかるべき(四一三五〇、三五二一)一

要は、親の面目を潰すな、いい加減な男の言葉にのせられて宇治を離れるな、人から非難されぬ様にせよ、というのである。この遺訓が、大君の思慮や行動を規定したとみる向きも多い。然しこの遺訓には「おぼろけのよすがならで」という例外規定が示されて居り、薫はその例外的な人物で、寧ろ八宮は娘と薫との婚姻を望んでさえた事が明らかである(二)。従つて、大君の結婚拒否の原因として、八宮の遺訓を考えるのは、妥当な見解とは言えない。大君が拒否の理由に、「今はとて、さばかりの給ひし一言をだに、たがへじと、思ひ侍れば(四一

三九九」などという様に、その遺訓を持ち出すのは、父の言葉の真意を誤解していたからかという、それも亦否である。父宮一周忌の夜、歌をるに意中を訴えられた大宮の「故宮も、さやうなる御心ばへあらばと、の給ひ、思すめりしかど、みづからは、猶、かくて過ぐしてん。(四一三九四、三九五)」という述懐をみれば、彼女が父の言葉の意味も、希望も、よく理解していた事が解る。理解した上で、それに反してでも、自分の意志を貫こうとしているのである。彼女は遺訓に規定されているのではなく、遺訓を口実として利用していると言わなければならない。又、彼女が薫に、自分の代わりに妹中君を、と薦める事からも、彼女が父の命に従う為に結婚拒否を貫いたのではない事が明らかとなる。彼女が遺訓を誤解していたなら、妹の結婚も、自らと同様拒否せねばならぬ筈である。大君は、妹中君に対しては、忠実に遺訓を履行せんとしたのである(三)。

二

では彼女が自分の代わりに妹を薫に薦めたのは何故だろうか。一般には妹の幸せを願うが故の姉心の為と言われる。大君が薫を愛していた事は、物語中に容易にみて取れる(4)。であるから妹の事を思つて自らは身を引いたという事になり、それが結婚拒否の理由であつたとも言われる。彼女の人物像に妹を思う母の如き姉心の付される所以である。然し果してそうであらう

か。大君死後中君は、姉君が薫との結婚を拒否したのは、男の心は頼み難く、結婚は女に不幸を齎すという事を思慮深くも考えたからだ、とかんがえている(5)。然し若しそうだとすると、大君が中君と薫の婚姻を望んだ事を如何様に解釈す可きか。結婚の不幸を知る事と、妹の幸せを願つて結婚を勧める事は、明らかに矛盾している。一方大君自身の側に即してみてゆくと、「せめてうらみ深くは、このきみをおし出でん(四一三九八)」といった述懐を見出す。薫の求婚を拒否しつつ、深く恨まれぬ様にする為、妹を「おし出でん」とするのであり、妹の為というよりは寧ろ自己の為といった面の方が遙かに大きい。これは後の巻で、中君が浮舟の存在を薫に告げるくだりと似通っている。唯、異なる点は、大君が薫を愛していた事であるが、それは妹の幸せの為自らの愛を犠牲にしたという事を意味するものではない。「身をわけたる、心の中は、みなゆづりて、見たてまつらん心なんすべき(四一四〇二)」という言葉が示す様に、それは寧ろ彼女が薫を愛するが故の行為である。彼女は妹の肉体を薫に与える事によって、自らの結婚拒否を徹すと同時に、彼の心を自らに繋ぎ止め、妹と一つ心で精神的愛を存続させようと企てたのである。そこに妹の気持ちも薫の気持ちも考えぬ、彼女のエゴイスティックな面が現れている。又、大君の姉妹愛がさほど深いものでなかつた事は、彼女の死を考えてみると、一層明らかになる。彼女の死が、自殺と迄は言えずとも、可成りそれに近いものである事は間違いない(6)。妹を薫に、と考

えるのは妹なら私が後見をしてやれるからだ、と思っていた(8)彼女が、その妹の事を捨て置いて死に急ぐ。生きて妹の世話をしようなどとは考えない。結婚拒否の為に死ぬ事が第一、さもなければ、父宮には娘達が心配で果たせなかつた行為、即ち出家を、と考える(8)。あまり妹の事を考えているとは言えまい。とはいえ無論、彼女に全く妹を思う心が存しないという訳ではない。死を思ってから彼女が、妹にも薫にも、そして自分にも、自分の死は定めなのであり、自分の願うところではない、と納得さす可くつとめているの(9)は、彼女の後ろめたき故であらう。その後ろめたさは、妹の事を放り出す行為に対する罪悪感であり、それが彼女の中の姉妹愛の存在の証となる。然しその罪悪感の為に、自らの意志を変更する様な事の無いところに、彼女が妹の幸せを第一に考えていたのではない事が明らかである。

三

物語中の大君の思惟を辿ってゆくと、彼女が自分は美しくなく(10)、後見もない(11)、だから結婚する事は出来ない、と考えていたのだとも思われる。妹は美しい(12)、だから妹なら薫と結ばれる事によって幸福になれる筈、その為妹と薫との婚姻を望むのだと。醜貌と後見の無さを自らの結婚拒否の理由としているのであるが、大君が自身の容貌を、本当に醜いと考え

ていたかどうかについては、些か疑問がある。「目も鼻もなしとおぼゆるは、心のなしにやあらん(四—四二七)」という述懐をみるならば、彼女が実は「目も鼻もなし」と思っていた事が解る。然し古女房達の姿から、それも「心のなしにや」つまり思い込みにすぎないのであって、きっと自分で思うよりずっと——と悪い方へと思い込む。この思い込みは些か強引で殊更めいている感を否めない。結婚拒否貫徹の為に都合のよい様に思い込もうとしている如く感ぜられる。又、彼女自身、薫の誠実が美醜に拘泥しない事を承知してもいる(14)。美しくないから、というのはあまり決定的な理由とはならない様である。一方後見の無い事という、相手は薫であるから、矢張りあまり問題とはならぬ筈である。父八宮は、薫が娘一人のうち何方か一人と結ばれ、今一人の後見をもしてくれる事を願っていた(15)。謂わば薫自身が後見になるのであって、薫に対して後見がないから、と拒否するのは如何か。実際に中君勾宮の三日夜の餅の準備等にしても、薫の手を借りねば、殆ど何も出来ないであり、妹の後見には私になれるから、という言葉も虚しい。又、彼女が妹の後見役を自ら放棄した事も既にみた通りである。後見の有無も姉妹の大きな差とはなり難く、結婚拒否の理由としても些か弱い様である。寧ろ拒否の為に態々持ち出した様と考えられる。

四

藤原貴族社会下の婚姻制度、即ち一夫多妻婚の下では、二心無き愛は成立し得ず、蕪として例外とはなり難い。大君の結婚拒否は、それを深く洞察しての事とも言われる。例えば匂宮の宇治への訪問の途絶えも、紅葉狩りの折の事も、夕霧六君との結婚も、総ては貴族社会の制度的な問題の故である。これらを見るに、大君が貴族社会の病弊を感じて結婚拒否をしたというのは、確からしく感じられる。然し彼女自身の匂宮に対する考えを今一度みてみる必要がある。彼女の匂宮の行為への解釈は少々違っていて、総てが彼の「月草の色なる御心(四―四三九)」の「なおざりの御すさび(四―四四八)」故、と考える。更には蕪の心も結局は同じであろうと考えを進める彼女の姿は、寧ろ頑迷とさえ言え、またしても殊更めいた強引さを感じずにはいられない。何れにせよ、彼女の関心は男の心へのみ向けられ、貴族社会下での婚姻制度は問題としていないのである。物語は貴族社会の病弊を命題としているかの如くであるのに、命題を背負う可き大君自身は、その命題をよく理解し得ていないのだと言える。

五

寧ろ、より精神的なところに結婚拒否の理由を求める方が一

般的であって、彼女の仏教的人生観故だと説かれる事が多い。次にこの彼女の道心について考える。実は物語中の彼女の言辭、行動には、出家の本意の深さ、道心の堅固さは殆ど表れておらず、多くは第三者の想像の域を出ない。又、父宮の教育方針も、都の雅を志向していた。無論それらは、大君が道心を持たぬという証とはならぬが、彼女の道心について再考の余地のある事は示唆しよう。そして前述の如く、彼女の死が自ら選んだものである事を考えるならば、その仏教理解の程度の低さも自ら知れるのである。自殺が深い罪である事は、蕪の言に、「それもと、罪深かなることこそ。かの岸に到る事はあれど、さしもあるまじうて、深き底に沈み過ぐさむも、あいなし。(五―一二)」とあるによっても知られる。又、彼女が出家を願うのも、物語中一度、死を前にして、若し死ねなかつた場合には蕪との結婚を拒否する為に出家を、と願う時のみである。つまり結婚からの逃避を出家の目的としている。後に浮舟も亦、仏教理解の浅い者として、入水自殺を試みるが、その浮舟でさえ、死を決して経を読む。然し大君に関しては、その様な記述もない。唯彼女の考えるのは、父宮の元へ行く事であり、其処が善所ではない事は、彼女自身承知している(17)。彼女に深い道心があったとは言いがたく、その意味で、蕪の愛したのは、自らが作り上げた大君の虚像であつたと言えるのである。

然し大君の仏教理解の程度が低いものであったにせよ、彼女の置かれた環境から、世の定めなき、無常觀を深く感じたであろう事迄は否定出来ない。そして前述の如く、彼女の関心は男の心の問題にあるのだから、多くの論者により、薫を含む男の延ては人の、心の頼み難さこそが、大君の結婚拒否の理由とされるのも故無しとしない。ところで大君と薫の間には、精神的繋がりが既に出来ていたと考えてよいが(18)、彼女が恐れたのはそれを失う事、即ち「おろかならず見ゆる心ばへの、見劣りして、我も人も見えん(四一四五九)」事であった。そして人の心変わり案する彼女が考え出した方法は、死か出家であり(19)、そうする事だけが愛を存続させる手段であると信じたのである。それは逆に言えば、そうする事によって薫の心が変わるなどとは、彼女は少しも考えていない事を示す。結婚すれば変わるかも知れないが、しなければ薫の心が変わる事はないと信ずる彼女は、本当に人の心を頼み難いと考えていたと言えるであろうか。答えは否である。つまり薫の心が頼み難い為に大君は結婚を拒否したのではなく、薫の変わらぬ心を信じる故拒否したのである。結婚を拒否する事によって、変わらぬ愛の存在を計ったのだと言える。

実際の処、大君の人物像を考える時、其処に彼女の結婚拒否の理由を求めると、最も理解しやすいのではないかと思われる。彼女は既に手に入れていた薫の愛を失いたくなかった。「長き心をも、かたみに見つべき(四一四五九)」事、その為に今の二人の距離を保ちたい。つまり現状維持が彼女の願いであり、その為の死、出家であり、妹と薫との結婚推奨であった。父宮の遺訓、容貌、後見、道心、男の心の頼み難さ等、総てその行為即ち結婚拒否に正当性を持たせる為の「手段」であったと考えられる。それらは、結婚拒否の「動機」ではない。結婚拒否自体が、現状維持の為の「手段」であったのである。そして大君は、結婚を拒否し精神的愛を存続させる事のみを考え、薫の心のうちの苦悩については等閑視する。死後も今の儘愛され続けたいと願う彼女が、後々迄薫を苦しめる事になる(20)。然し彼女はそんな事は考えない。「さすがにながらへよと、思い給へる心ばへも、あはれなり。(四一四四六)」と感じつつ、それでも生きようとはしない大君は、愛するよりも愛される事を、より欲したのである。此処にも彼女のエゴイスティックな面が露呈していると言える。

*

*

以上概ね、大君の人物像について述べんとする処は述べ終わった。大君は父想い妹想いであるが、同時に彼らを利用し、犧

性にし、薫を愛しているが、彼の内面の苦悩は等閑に付す。仏教的環境に身を置きながら、道心が深い訳でもなく、思慮深い一方、つまらぬ誤解、妙な思い込みをしたりする。大君は斯様な複雑な人物として作品世界に存在しているのである。何故作者は、大君をそのような人物として造形したのであろうか。次章に於いて、その点に關して考察を進める事とする。

第二章 大君物語の構造

一

一見すると大君という人物は、父や妹の事をよく考え、道心深く、思慮深い肯定的さる可き人物の様に思われる。然し實際は前章でみてきた様に、父や妹の事を利用し、犠牲にしたり、仏教(出家)を逃避の爲のものとして考えるのみであったり、強引な思い込みや浅薄な誤解も多いなど、否定的側面も明らかに存在している。この肯定的、否定的両側面は、どちらも、大君の人物像の一部であり、どちらも彼女の内存在するのである。では何故斯様な対立、矛盾する様な性質を合わせ持つ複雑な人物として大君は造形されたのであろうか。この大君の二面性のうち、否定的側面について考えるならば、それらの諸点は概ね、彼女が結婚を拒否する為に、持ち出されて来たものであると言えよう。結婚を拒否する、という一点に關してのみ、彼女は頗

るエゴイスティックで頑迷になっていると言える。父の遺訓を守るというのも、妹を幸せにするということも、容貌の衰え、後見の無い事、又道心も男の心の頼み難さも、総てが、謂わば結婚拒否の爲の「口実」とされていた。現今の薫と自分の距離を保ち、愛を存続させる、その為には結婚を拒否する事が最重要事である。結婚拒否を貫徹する為、或いはその正当性を証する為、その手段として種々の事柄が利用され、犠牲にされているのである。そしてそれは、作者にとつても同断なのではないか。作者にとつて大君は、薫の求婚を拒絶し、同時に薫の心の中に深くその存在を刻み込む人物として造形さる可きものであり、その二点が、大君存在の「目的」であつたのではないか。大君の性格、容姿、思考等は、総てその為の「手段」であり、大君自身と他の登場人物、そして読者達に、共感させ、納得させる為に設定されたものである。つまり大君は、薫が熱烈に想い、永遠にその存在を心に刻み込み、読者達或は作者自身も共感、同情、感情移入する様な素晴らしい女性でなくてはならなかった。同時に彼女は、薫との結婚を拒否し続け、尚且つ、薫の心に留まり続けねばならなかったのである。ところが、彼女の肯定的な面、素晴らしい女性である処からは、結婚拒否を、正当化、納得させ、貫徹させる事が出来ない。そこで結婚拒否の正当化の為、又大君自身、他の登場人物、読者達を納得させる為に、幾つもの手段、口実が持ち出されたのである。即ち、大君の結婚拒否の爲の殊更めいた感さえ与える強引さは、物語

自体、或いは作者自身の強引さでもあると言える。そして結果として、大君の人物像は複雑になって仕舞わざるを得なかったのである。物語の展開が、それを要求したのだと考えられる。薫という人物と大君という人物が、先ず先にあって、その人物間の絡みの必然として、物語が展開しているのではなく、物語の予定された展開の為に、人物少なくとも大君の設定が牽引させられているのである。作者にも大君にも、先ず結婚拒否を貫徹する事が先に決められ、要求されていた。彼女らはその為に精一杯努力しているのである。

二

前章でも取上げた、大君死後の中君の述懐を再びみてみよう。自分は軽率にも匂宮について宇治を離れて仕舞った。その為斯く辛い目をみている。それに対して、あの誠実な薫の心さえ不変ではないと考え、拒否し通した姉君は、何と思慮深く立派であられた事か(21)。彼女は一方で姉君が、自分と薫を結びつけようとしていた事や、匂宮を自分の元へ導き入れた(中君はそう考えていた)(22)事を忘れて仕舞って、その立派さを賛嘆するのである。この述懐は、藤村潔氏の指摘する様に「大君の結婚拒否に読者を納得させるにたる充分な必然性を付与することができなかった」作者が、中君を借りて、「大君の判断の正しさを読者に印象づけ」る為の、謂わば「だめ押し」である(23)

と考えられる。多少の矛盾を犯してでも何とか読者を納得させ、決められた構造に沿って物語を展開させようとする作者の強引さが現われている。或いは、精一杯の努力、苦心と言ふべきか。又、八宮の気持ちを知っていた薫が、大君に「なほ、かゝるさまにて、世づきたる方を思い絶ゆべく、おぼしおきてけるとなん、思い合はせ侍れば(四一三八三)」と、父宮の遺志を持ち出され、簡単に引き下がるのも妙であるし、姫君達が自分の出生の秘密を知っているかもしれないと考えて、どうしても自分のものにせねば、と思っていた薫が、彼女らの事を匂宮に知らせ、中君に通わせたりする事も些かおかしい。これらも大君に結婚拒否を貫徹させ、その儘死へと向わせる為の矛盾であらう。つまり、大君物語の展開とは、多少の矛盾や不自然さを犯さずにはいられぬものであり、その不自然さ、矛盾が、大君の人物設定にも表われざるを得なかったと考えられるのである。

三

大君物語が、大君と薫との結婚拒否を先決事項とした上で、進められている事を物語の構造より考えてみよう。大君物語は言う迄もなく、宇治を舞台として展開されている。宇治とは都に對する異郷である。作者は繰り返し宇治の自然を叙述して、其処が都とは隔絶した、異なった土地である事を印象づけている。つまり宇治と都は異なった世界であり、宇治は都に對する

異郷、逆に都は宇治に対する異郷である、と捉え直す事が出来る。宇治十帖は、薫の物語であると同時に(或いはそれ以上に)宇治の三姉妹の物語でもあるのだから、常に薫の側、都の側からのみ考えるのは不適切である。宇治からみれば、都が異郷なのだ。都に対する宇治の側の感情は、「下人にても、宮の方よりまゐり、立ちまじる人侍るときは、音もせさせ給はず(四一三三)」などの記述にみられる。都をすぐれた場として崇拜し、逆に自らの住む宇治を片田舎の土地として、頗るコンプレックスを持っていると解る。薫はその素晴らしい世界である都より、自分たちの土地宇治へと幾らかの期間を置いて来訪する存在である。高橋亨氏は、薫が宇治を訪れる橋姫巻の叙述(24)と大赦詞との関連から「霧・風・水といったイメージ群は、その心象風景の基底に、〈罪〉と〈流離〉の意味を響かせてく」と指摘している(25)。ところでその大赦詞の持つもう一つの、「根の国、底の国」のイメージをも帯びて、薫は八宮邸へ現れたとも考えられる。根の国、底の国、或は常世といった様な他界から、薫は宇治へと来るのである。霧と水音につつまれた宇治へ、その霧や水音の「向こう側」から、「やつした神の姿」(26)をして。そういった点からみると、薫は明らかに「マレイト」或いは「異人」(27)の相貌を持つのである。彼は宇治八宮家に先ず幸福を持ち来る。

この君の、かく、尊がりきこえ給へれば、冷泉院よりも、つねに、御消息などありて、年ごろ、音にもをさく聞え

給はず、いみじく寂しげなりし御すみかに、やうく、人目、見る時くあり。折ふしに、とぶらひ聞え給ふこと、いかめしう、この君も、まづ、さるべき事につけつゝ、をかしきやうにも、まめやかなるさまにも、心寄せ仕うまつり給ふ(四一三三)

といった具合であり、八宮もそれを「かく、しばく、たち寄らせ給ふ光に、山の陰も、すこし、物、あきらむる心ちしてなむ(四一三三五)」と喜んでゐる。そして「ところにつけたる御あるじなど、をかしうしなし給(四一三三八)」うて、薫を饗応する。異人歓待である。又、八宮が「阿闍梨の住む寺の堂に、うつろひ給ひて、七日ほど、おこなひ給ふ(四一三三〇)」間に、薫は宇治を訪れ、大君中君姉妹の合奏を仄かに聞く。この場面は、「賓客をもてなすためにその家の娘や妻を夜伽に提供する風習」(28)があり、「家人は出拂うて、特定の女だけが残って居る」(29)という異人(マレイト)歓待の一典型である。かように大君物語前半部は、異人来訪と異人歓待の構造に沿って展開されているとみられるのである。

四

では大君物語後半部(30)では如何か。マレイトは幸福を与えに訪れる者として期待、尊崇されると同時に、恐れ、畏怖されるものであった(31)。異人たちは時に幸福を、時に災厄を齎す

者だからであり、彼らを迎える共同体は、彼らに対して歓待する場合と忌避、虐待（排除）する場合があった（32）。大君物語前半部では、薫は宇治八宮家に幸福を齎し、八宮は彼を歓待した。これに対し後半部では薫は災厄を齎し、排除されたとみられるのである。薫が齎した災厄とは、先ず八宮の死である。無論八宮の死は薫の所為とは言えないが、薫の来訪が始まってから起こった事として、ひとまず外から齎された災厄と捉える事が出来よう。又、大君に言い寄って「恋」を持込み、穏やかな宇治の世界をかき乱し、あまつさえ、中君の元へ匂宮を導き入れたりもする。つまり、外の世界から未知の物事を持ち込んで、平和に暮らしていた姉妹を苦しめる事となって仕舞っているのである。これに対して、薫の排除とは、勿論、大君の徹底した結婚拒否、拒絶という形で遂行されている。つまり大君の結婚拒否は、異人（マレビト）の排除という、物語の構造の上からも、要求されていたことが解る。薫は異人（マレビト）として宇治に現われ、結局は異人として排除される、というのが、大君物語に埋め込まれた大きな枠組みなのである。

五

物語内に異人というものに関する概念が埋め込まれている事を、少し違った方面から考証してみよう。宇治十帖において、宇治という土地の持つ重要性は言うまでもないであろう。特に

大君物語では、宇治からあくがれ出る事が、結婚拒否と重ね合わされて、厳しく忌避されている。自らの属する共同体からの離脱が厳しく戒められているのである。これに関して『遠野物語』の、山人と神隠しにまつわる民譚（33）を読み解く吉本隆明氏や赤坂憲雄氏の論考を参考にしたい。吉本氏は、

この種の山人譚で重要なことは、村落共同体から離れたものは、恐ろしい目にあい、きつと不幸になるといふ（恐怖の共同性）が象徴されていることである。村落共同体から「出離」することへの禁制（タブー）が、この種の山人譚の根にひそむ（恐怖の共同性）である。

と指摘する（34）。又赤坂氏は、山人と交渉を持ち、共同体より去った者（神隠しに会った者は、永遠の別れの前に、一度だけ親族か知人の前に現れるのが、一種の法則として、どの地方にも、信じられている事であると述べた上で以下の様に言う（35）。
出奔者は現在の不幸を、いわば共同体の外なる世界に生きることの悲哀を里人たちにかいま見せて、永遠にたち去ってゆく。それはむろん、共同体の禁制にそむいた者の悲惨な宿命として、共同体の成員たちが「強いられた定住」に耐えつづけるための、ある見せしめの光景であったにちがいない。

引用が長くなったが、これを物語に引きつけて考えると如何なるであろうか。宇治を離れるなど言い遣した八宮（但し例外規定はあるが）、決して宇治から離れまいとする大君、それに対

して、勾宮に従って宇治を離れて仕舞った中君。つまり中君は勾宮という異人に連れられて、共同体の外へと出離して仕舞ったのである。彼女は後に宿木巻で、自分の軽薄さから宇治をあぐがれ出て、不幸をかこつ身になって仕舞った事を嘆き、対する姉大君の立派さを賛嘆する。それが大君の結婚拒否の正当性を読者に納得させる為の、だめ押しであるという事は、前章で述べた。宇治という共同体を離れる事と、結婚を重ね合わせて、共同体を離れた者の不幸、結婚した者の不幸を、「みせしめ的な光景」として描き出しているのである。山人(という一種の異人)と神隠しにまつわる民謡に内在する構造や、里人達の心性が、宇治の物語にも明確に存在する。共同体成員と外から来る者(異人)、その対立するものの觀念が、大君物語に取り込まれていると言つてよいのである。

六

紫式部が、高崎正秀氏の指摘する様に(36)、古代文芸の伝承の管理、説話の管理族の血を承けていた事を考えるならば、物語中に、古い伝承文芸が幾重にも取り入れられている事も不思議ではない。特に、宮道家の伝承する高藤伝説などに関して、高藤氏が、

高藤伝説・山吹の里の話などが、『雨』を背景として語られることは、古い感覚の残存を見せている。要は、養立姿

で来りのぞむ稀人神(マレヒトガミ)と、これに奉仕する巫女との交歓が源初形なのであった。

と述べている(37)のは興味深い。異人(マレヒト)に関する古代人の心性、信仰、何らかの伝承の型が、大君物語に取り込まれているという事も、それほど突飛な考えではない筈である。同じ方面から「橋姫」について考えてみると如何であろうか。一般に「橋姫」は大君の事を喩えていると思われる訳であるが、この「橋姫」は、

而して何故にこの類の氣質(憤り嫌ひまたは不承知など。

筆者注)ある神を橋の邊に祭つたかといふと、敵であれ鬼であれ、外から違つて来る有害な者に対して、十分にその特色を發揮して貰ひたいためであつた。

と柳田国男が述べている様に(38)、外から来る者、即ち他所者を追い払って、共同体を守る神、というのが本来の姿と考えられる。無論ここで他所者というのが、薫の事であるのは、言う迄もあるまい。つまり薫が拒絶される事は、この「橋姫」という言葉によって既に予想、或は決定されていた事であつたと解るのである。

*

*

さて、長々と述べてきた。多少逸脱する部分も有るかと思うが、要は、大君物語の枠組みは初めから決められていたものであり、何よりも大君の結婚拒否を最重要事項として、総てがそ

の為に奉仕させられたのである事、その為に、作者の意圖に反して大君の人物像は頗る複雑なものとならざるを得なかった事、などが述べたかったのである。薫は排除される可き異人として、外部から宇治へと登場して来たのであった。一方大君は宇治という共同体を守り、外部から来る者を撃退する橋姫であつた。二人が結ばれる事などは初めから考えられてもいなかったのである。では然し、作者は何故、結婚拒否の物語を描かねばならなかったのか。幾つもの矛盾をも顧みずに。この点に関しては次の課題として追及し考察を加えてゆきたい。そうする事によつて、浮舟物語と大君物語の関連についても、色々と明らかとなつて来る筈のものと思うのである。

注

(1) 本稿での『源氏物語』本文の引用はすべて岩波書店日本古典文学大系に依る。但し「」及び振仮名は省略した。尚本文引用後の○内の数字は古典文学大系本の巻数及び頁数を示す。

(2) 「宰相の君の、おなじうは、ちかきゆかりにて、見まはしげなるを。(四一二四)」という八宮の述懐や、弁の君の「此の殿の、さやうなる心ばへ、物し給はましかば、一所を、うしろやすく見おきたてまつりて、いかに嬉しからましと、折／＼のたまはせし(四一四〇二、四〇三)」という言葉などから解る。

(3) 八宮の遺訓について多田惇子氏は「宇治十帖女性論」(『学習院大学国語国文学会誌』第十号)で、「「おぼろけのよすがならで云云」という言葉の奥には、身分高く誠実な薫を頼れという意味が含まれている」と指摘している。

(4) 「日頃、おとづれ給はざりつれば、おぼつかなくて過ぎ侍るべきにやと、口惜しくこそ侍りつれ(四一四五五)」

「空しくなりなん後の、思ひいでも、心ごはく、思ひ限なからじと、つゝみ給ひて、はしたなくも、え押し放ち給はず。(四一四五〇)」などの部分に端的に表われている。

(5) 「中納言の君の、いまに忘るべき世なく、嘆き渡り給ふめれど、もし、世におはせましかば、又、かやうに、おぼす事はありもやせまし。それを、いと深う、いかで、さはあらじと、思ひ入り給ひて、とざまかうざまに、もて離れん事を思して、かたちをも、變へてむと、し給ひしぞかし。(中略)今思ふに、いかに、重りかなる御心掟てならまし。(五一四一)」とある。

(6) 五島美代子「源氏物語宇治十帖に描かれた愛について」(『印度学仏教学研究』一卷三号)参照。

(7) 「人の上になしては、心の至らん限り、思ひ後見てん。みずからの上のもてなしは、又、誰かは見あつかはん。(四一三九五)」と考えていた。

(8) 「もし、命、しひてとまらば、病にことつけて、かたちをも變へてん。さてのみこそ、長き心をも、かたみに見つ

べきわざなれ(四一四五九)」

(9) 妹君には「明日知らぬ世の、さすがに歎かしきも、誰がため惜しき命にかは(四一四五二)」と、薫には「たゞ、消え入るやうにのみなりゆくは、口惜しきわざにこそ(四一四六〇)」と言っている。

(10) 「われも、やうく、さかり過ぎぬる身ぞかし。鏡を見れば、やせくになりもて行く。(四一四二六、四一四二七)」という記述がある。

(11) 注7参照。

(12) 「いと盛りにて、うつくしげなる匂、まさり給へり。

(四一三七九)」

(13) 注7参照。

(14) 「劣りざまならんにてだに、さても見そめてば、あさはかにはもてなすまじき心なめるを(四一三九八)」と薫の事を考えている。

(15) 注2の弁の君の言葉参照。

(16) 八宮は「琴習はし、暮うち、偏つきなど、はかなき御あそびわざ(四一三〇〇、三〇二)」をさせて娘達を育て、

「かゝる山ふところに、ひきこめては、やまずもがな(四一三四二)」と考えていた。

(17) 夢に八宮を見た阿闍梨が、「いさゝか、うち思ひしことに、亂れてなん。たゞしばし、願ひの所を隔たれるを思ふなん、いとくやしき。(四一四五七)」という八宮の言葉を、

大君に伝えている。

(18) 森一郎「薫の道信と恋」(『源氏物語探究会編『源氏物語の探究』第二輯 風間書房昭和五二年発行参照)。

(19) 注8参照。

(20) 薫は、死に瀕する大君を見つめ、「すこし憂きさまをだに見せ給はゞなむ、思ひさます節にもせん、(四一四六二)」と知っているが、それに対し大君の方は「空しくなりなん後の、思ひいでにも、心ごはく、思ひ限なからじ(四一四五八)」と考えている。

(21) 注5参照。

(22) 「さまぐに思しかまへけるを、色にもいだし給はざりけるよと、うとましう、つらく、姉宮をば思ひ聞え給ひて、目も見合せたてまつり給はず。(四一四一八)」とある。

(23) 藤村潔「源氏物語の物怪について」(『源氏物語の研究』桜楓社昭和五五年発行)

(24) 八宮の留守中、姉妹の合奏を仄聞く折の訪問の描写である。

(25) 高橋亨「宇治物語時空論」(『源氏物語の対位法』東京大学出版会昭和五十七年発行)

(26) 折口信夫「國文学の發生(第三稿)」(『折口信夫全集』第一巻中央公論社)

(27) 折口信夫の「マレビト」は、文化人類学の「異人」の概念の一部をなすものと考えられる。但し折口の「マレビト」

は、小松和彦氏の指摘する様に、「人びとから災厄をもたらすものとして忌避され排除され、時と場合によっては虐待・虐殺されることさえあった「神霊」(もしくは「妖怪」)や「異人」(もしくは「ごろつき」)を含まない点で不完全であると言える。よって本稿ではそういった「負」のマレビトも含めた上での「マレビト」として「マレビト」という語を使う事とする。小松和彦「異人論への人類的視点」(『異人論』青土社昭和六〇年発行)参照。

(28) 朝倉治彦、井之口章次、岡野弘彦、松前健共編『神話伝説辞典』(東京堂出版昭和三八年発行)「まれびと」の項。

(29) 注26に同じ。

(30) ここでは八宮の死から大君の死の辺りを後半部としておく。

(31) 注26に同じ。

(32) 小松和彦「異人殺しのフョークロア」(注27前掲書)参照。

(33) 『遠野物語』六、七など。

(34) 吉本隆明「禁制論」(『改訂新版共同幻想論』角川書店昭和五七年発行)

(35) 赤坂憲雄「異人論序説」(砂子屋書房昭和六〇年発行)

(36) 高橋正秀「紫式部の母系」(山岸徳平・岡一男監修『源氏物語講座』第六巻、有精堂昭和四六年発行)

(38) 柳田国男「橘姫」(『定本柳田國男集』第五巻筑摩書房昭和四三年発行)